

## 事例報告

総合系科目・学びの精神「多文化共生社会と大学」／多彩な学び「多文化共生社会と日本」

# やさしい日本語で実施する統合型協同授業 —試行錯誤の中で—

異文化コミュニケーション学部教授／日本語教育センター長 池田 伸子  
日本語教育センター特任准教授 任 ジェヒ

## はじめに

本学では、多様で優秀な留学生を獲得するための新しい留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」をスタートさせ、2022年からその制度による留学生の受け入れを行っている。その新制度では、英語による授業のみで教育課程を構成するPEACEプログラムと、入学時点で日本語能力試験N3程度の日本語能力を求め、その後、半期の日本語集中プログラムなどを経て日本語で学位を取得していくNEXUSプログラムの学生を受け入れている（立教大学、2021）が、本稿では自国で高校を卒業後すぐに本学に入学してくるNEXUSプログラムの学生（以下Ns）が第1学期目に「学びの精神」科目として履修する「多文化共生社会と大学」と、その科目と一体的に展開され、NEXUS以外の学生（以下NNs）が2学期目以降に「多彩な学び」科目として履修する「多文化共生社会と日本」について紹介する。

## なぜ「やさしい日本語」なのか、なぜ2科目を一体的に展開するのか

Nsが入学時に求められる日本語能力は、文部科学省（2024）が国内の大学において日本語で学位を取得していく場合に留学生に求める日本語能力（日本語能力試験N2レベル相当以上）よりも低い。そのため、Nsが入学後すぐに日本語で行われる大学の専門科目を理解していくためには、授業で用いる日本語の調整（話すスピード、使用する語彙や文型等）が必要となる。

そうであれば、Ns用の「学びの精神」科目を独立で展開し、そこで「やさしい日本語」を用いればよいのではないかと思われるかもしれない。しかし、「学びの精神」科目群の目的は、「なぜ学ぶのか」を理解すること、「教員との議論、学生同士の協働作業などをとおして、自ら調べ考える姿勢を養い、学生が所属する大学で学ぶことの意味を理解すること」（立教大学 全学共通科目）であり、Nsが履修する「多文化共生社会と大学」では、「2名の教員やTAとの議論、NNsを含む学生同士の協働作業などをとおして、日本の大学での学び方を知り、教員やクラスメイトとのつながりを感じることで、本学に定着できるようになること」を目標としている。そして、その目標を達成するために

は、Ns だけで隔離された環境で学ぶのではなく、彼らが卒業までに数多く経験していく授業環境—日本語を母語とする学生や日本語力が高い留学生と一緒に履修する環境—を通して学んでいくことが必要となる。

一方、NNs が履修する「多彩な学び」科目「多文化共生社会と日本」では、「日本における多文化共生社会の実現のために、日本国内の日本語母語話者（言語的マジョリティ）、日本国内で生活する日本語上級者（生活に不自由を感じていない者）として何をすべきかを考える」、「やさしい日本語の運用能力を高める」という 2 つの到達目標を掲げている。そして、この到達目標を達成するためには、言語的マジョリティの学生だけが参加するのではなく、Ns とともに学ぶ環境が必要である。

つまり、異なる到達目標を持つ「多文化共生社会と大学」、「多文化共生社会と日本」は、2 つが統合的に展開されたとき、そこに Ns と NNs がともに学ぶ「実践的学びのコミュニティ」が形成され、それぞれの科目の到達目標が達成されるのである。

## 授業運営における試行錯誤

### ○実践的コミュニティの形成

2 つの科目を統合して実施する最大の目的は、教室に「実践的コミュニティ」を形成することである。教員と学生、教員と教員、教員と TA、学生と TA、学生同士が不安や戸惑いを感じることなく自由に日本語で意見交換や質問ができる空間、さらには、教室という空間を出たあとも、学期が終わったあともつながり続けるコミュニティをどうすれば作れるのか。22 年度から今日まで、試行錯誤を重ねている。

まず、22 年度から 3 回目となる 24 年度まで継続しているのは、14 週で実施する授業活動のバランスと扱う内容である。今回紹介する 2 つの科目は、週 2 回授業がある 4 単位科目であり、学期中 28 回授業が実施される。その 28 回の授業では、「文化とは何か」、「他者理解」、「日本を含む 7 つの国の多文化共生」、「〇〇人意識」、「人権」、「市民権」、「社会統合政策」、「大学」について扱うが、教員だけが 100 分話をする授業は行わないことにしている。毎回の授業において、常に教員の講義よりも学生の活動を多くするように計画し、グループ活動の際には、必ず Ns と NNs でグループを作るよう、また、グループは毎回変え、教室にいるすべての学生が交流できるようにしている。

講義以外で取り入れている授業活動としては、ロールプレイ、グループディスカッション、グループプロジェクト、個人・グループでのプレゼンテーション等で、単調な話し合いにならないよう、学生の回答を瞬時に共有できるアプリの使用、ダイヤモンド・ランキングや個々の活動用のワークシート、小道具としてのカード等を作成して行っている。

もう 1 つ、22 年度から継続しているのは、Ns/NNs という境界を授業開始後すぐに取り除くための工夫である。授業開始後すぐのタイミングで、「参加学生が自分の〇〇人というアイデンティティを離れてまったく架空の××人となって実施するロールプレイ」を 3 週にわたって実施し、Ns なのか NNs なのかではなく、架空の××人、△△人、

□□人としての仲間意識を醸成する。そして、活動の振り返りで自分自身に戻る中で、クラスメイトをNsなのかNNsなのかではなく、お互い一人の立教生、(本当は別々の科目を履修しているのだが)同じ科目を履修しているクラスメイトとしてみる、という空気の醸成を目指している。

この統合型協同授業の成否は、参加した学生たちがどれだけ本気で、真剣に話し合いをはじめとするグループ活動に取り組むかにかかっているため、ロールプレイを通して一人ひとりの学生がクラスメイトを「NsかNNsか」、「日本人か外国人か」ではなく、同じ課題をともに解決しようとする仲間としてみるができる環境を作ることが重要なのだが、22年度に最初に試みた時には、それがうまくいかなかった。教員がロールプレイの設定を細かく学生に与えずぎってしまったため(国の名前、服装、言語等)、参加した学生が活動に没入できなかった(やらされている感覚が強く、活動での発言も自分ごととしてではないため、恥ずかしさや戸惑いを示す学生が多くみられた)のである。そこで、23年度からは、大きな枠組み(3つの国、国の状況等)だけを学生に示し、学生たち自身に国の名前、言語、国旗、髪の毛の色等を考えてもらい、ロールプレイの活動中は学生に自分の国の国旗を胸につけてもらうようにしたところ、22年度に比べて学生が活動に入り込んでいる様子が観察できた。ロールプレイについては、引き続き改善を続けたい。

### ○異なる教育目標への対応

Nsが「学びの精神」科目として履修する「多文化共生社会と大学」は、NsがNNsとともに様々な内容を学び、活動に参加することを通して、Nsが本学にしっかりと着地し、本学卒業まで自律的に学んでいくための基礎を身に付けることを到達目標としている。そのため、授業で課される様々な課題に積極的に参加し、NNsとの関係性を構築していけているか、求められる成果物を提出できているか(またその質)等を教師とTAが把握しながら、必要に応じて教育的な介入を行っていく。

一方、NNsが「多彩な学び」科目として履修する「多文化共生社会と日本」は、日本が多文化共生社会を実現していくためには何が必要なのかを理解し提案することに加えて、「やさしい日本語」の運用能力を高めていくことを到達目標としている。これらの2つの目標は、Nsとの一体的な授業活動の中で身に付けていくのだが、「やさしい日本語」の基礎については授業中に扱うことができない。そのため、LMSを利用した授業外でのタスクを設定し(週に1つ、全部で12個)、提出されたものに教員がフィードバックを行うという形で学ばせている。つまり、一種の反転授業の形式である。そして、基礎を学んできたNNsが、授業中のNsとの活動の際に、適切に「やさしい日本語」を使うことができているかどうかを意識できるよう、授業後に提出させるリアクションペーパーのフォーマットをNsとNNsで分け、NNsには、自分の「やさしい日本語」の使用を振り返らせるセクションを設けている。

Ns、NNsの授業を担当する教員が、それぞれ上記の学習目標を意識し、常に授業内

外で学生の状況把握や働きかけを行ってきた結果、参加した学生はそれぞれの科目の到達目標を達成できていることが示されている（池田、2024）。

### ○教員の役割と連携

今回紹介している統合型協同授業は、教員2名がそれぞれ自分の担当科目（Ns用の「多文化共生社会と大学」、NNs用の「多文化共生社会と日本」）の到達目標を把握し、その達成に向けて授業内外で履修学生に働きかけを行うことで成立している。

特に、授業外の働きかけは、Nsの授業を担当する教員とNNsの授業を担当するでは大きく異なる。Nsの授業を担当する教員は、授業内容理解の確認、学習ツールの提供、学習に関する助言、学生の理解に応じた支援的介入等を積極的に行い、Nsが不安を感じることなく統合型協同授業に参加できる環境を整えるための働きかけに注力しているのに対し、NNs担当の教員は、「やさしい日本語」課題へのフィードバックが主な働きかけである。

授業内での2名の教員の役割は、Ns担当の教員が主にNsの理解、活動への参加状況を確認し、必要に応じて適切な支援を行い、NNs担当の教員が教室の学生全体に対して授業で扱うコンテンツの提供、活動の指示を行うという形で分担している。しかし、授業内においては、教員によって働きかける学生を「A先生はNs、B先生はNNs」のように明確に分けることは不可能であるため、参加している学生全員に目を配りながら声掛けを行っている。1つの教室に教員2名とTAがいて、常に学生の様子を見守り、適宜、声をかけるという体制は、NsだけでなくNNsにとっても活動に参加しやすい環境を提供できているのではないかと、学生の様子を見ていて感じている。また、教員同士の意見のやりとりも学生にとってよい刺激になっているようで、2名の教員から異なる視点を示すことができるという点もこの授業形態のメリットではないかと感じる。

教員の役割という点で最も重要だと感じているのは、2名の教員のうちの1名がNsの科目を担当する教員であるということである。NNsは、誰がどの科目の担当なのかについてはそれほど意識していないようだが、Nsは自分たちを見てくれる教員がいるということを明確に意識しているようである。NNs担当の教員には聞けないことも、Ns担当の教員には質問したり相談したりすることができると感じているようで、それがNsの授業参加への不安を軽減させ、積極的な活動への参加を促している。このことから、今回紹介している統合型協同授業を実施した意義はあるのではないかと考えている。

しかし、過去2回の学生への調査から、授業中に過度に教員が介入することがNsだけでなくNNsの自律的な学びを阻害するのではないかと懸念が示されている（池田他、2025）ことから、今後は、適切な介入の在り方について、教員間で検討を行い、改善を図っていきたい。

また、統合型協同授業を担当する2名の教員は、毎回の授業だけでなく、様々な場面で連携を取り、お互いに相談、確認をしながら授業を運営している。この形式の授業を成功させるために、教員間の連携は必要不可欠である。過去2回の学生への調査

からも、Ns、NNs ともに教室にいる 2 名の教員の関係がよいことが、授業の面白さや楽しさ、さらには学ぶモチベーションにも関係することが示されている（池田他、2025）。今後もこの点を踏まえつつ、授業運営に当たっていきたい。

## さいごに

今回紹介した「統合型協同授業」は、今年度（2024 年度）でまだ 3 回目の実施で、Ns、NNs ともに履修した学生数がまだまだ少ない。しかし、3 回の実施を通して、この形態での授業が Ns、NNs どちらの学生に対しても、とてもよい学びを提供できていると実感している。履修した学生たちは、授業期間中も一緒にお昼を食べに行ったり、連絡先を交換したりする等、この授業の履修を通したコミュニティが作られつつあることを感じている。Ns が履修する「多文化共生社会と大学」の到達目標が本当の意味で達成されたかどうかは、Ns が本学を卒業し、それぞれの未来に向かって着実に進んだことを確認するまで検証することはできないが、今までこの科目を履修した Ns たちは、それぞれの学部でしっかりと学んでいっていることが確認できている。

今後、入学してくる Ns の人数が増え、「統合型協同授業」に参加する NNs の人数も増えていくことにより、本学の学びがより豊かで実践的なものになっていくことを期待したい。これから日本の多文化化はますます進んでいく。そのときに、この「統合型協同授業」を履修した人たちが、世界のどこかのコミュニティで多文化共生社会実現の要となってくれることを楽しみに、今後も授業改善を進めたい。

池田伸子（2024）「国際共修授業の可能性と課題—連想法による授業評価からの検討—」『日本語・日本語教育』第 7 号、立教大学日本語教育センター、1 - 20.

池田伸子・任ジェヒ・藤田恵（2025）「学生は統合型協同授業をどう受け止めたか—大学の一般教養課程での事例研究—」『日本語・日本語教育』第 8 号、立教大学日本語教育センター（印刷中）

文部科学省（2024）「令和 7 年度大学入学者選抜実施要項について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20240605-mxt\\_daigakuc02-000010813-3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240605-mxt_daigakuc02-000010813-3.pdf)  
(2024.12.11 アクセス)

立教大学（2021）  
<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2021/04/mknpps000001lqg4.html>  
(2024.12.11 アクセス)

立教大学 全学共通科目  
<https://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/subjects.html>  
(2023.12.2 アクセス)

いけだ のぶこ  
いむ じゅひ

## 授業見学報告

全学共通カリキュラム運営センター部長／法学部教授 浅妻 章如

2024年12月2日月曜日2限に、池田伸子先生と任ジエヒ先生が担当している「多文化共生社会と大学」「多文化共生社会と日本」の授業見学をする機会を得ました。この授業は学びの精神科目と多彩な学び科目を一体的に展開する科目として設計されています。教員2名の他にTAが1名ついているという手厚い体制でした。学生の日本語力はJ5付近であると思われる。

この日の授業のテーマは、20ほどの仮想事例に関し、或る人が日本人（又は△△人）であると感じるか否か、そう感じる又は感じない根拠はどこにあるか、を学生に考えさせるものでした。国籍判定に関しては、法学部の講義ならば、恐らく血統主義と出生地主義というものを教わることになります。しかしこの日の授業では、国籍は或る人が△△人であると感じるか否かの必要条件でも十分条件でもありませんでした。おおよそ、「血統」「文化/言語」「国籍」の3項目を検討し、或る人が△△人であると感じる又は感じないということについて、slido.comで集計したり学生個々に発表させたりグループディスカッションをさせたりするというスタイルでした。

池田先生の「感覚として、△△人と感じるかどうか、次に、そう感じた基準はどこにあるか考えてください」というおっしゃり方が良くも悪くも社会科学と異なり特徴的であると感じました。法学ならば、目的によって分類基準が異なる（例えば、△△人であるか否かの分類が、選挙の為なのか、社会保障給付の為なのか、課税の為なのか）という合目的分類思考を学ぶところですが、この日の授業では何のために△△人であると感じる又は感じないかは明示されていませんでした。法学を含む社会科学を学んで合目的に考える姿勢を身に付けた学生だったならば、目的なしに△△人であると感じる又は感じないかを議論することに意味はない、と感じて反発してしまう可能性もあるところ（この日は明示的にそのような反発を示した学生はいなかったようですが）。敢えて感覚を問うことで低学年学生でもとつきやすくしているという良い点と、もしかしたら合目的思考の学生には耐えられないかもしれないという悪い点が、混在していると感じた、ということです。

この日は学生12名に対し教員側（TA含む）が3名という手厚い体制でしたが、全学共通科目の総合系科目の参考になるだろうかと考えると、なかなかこのような体制を用意する資源はありませんので、難しいとも感じました。slido.comなどの機器やアプリの利用は参考になりそうです。また、学生が素直に自分の感覚を述べているところは、一方的マスプロ講義が多い法学部教員から見て、羨ましい（法学では寧ろ感覚を遮断する訓練が重要です。裁判官ごとの感覚の違いで判決が異なっては困りますから）とも感じました。

あさつま あきゆき

## 授業見学報告

外国語教育研究センター准教授 町 沙恵子

この度、池田伸子先生と任ジエヒ先生がご担当される「多文化共生社会と大学」、「多文化共生社会と日本」の10週目の授業を見学させて頂きました。まず教室を訪れて最初に感じたことは学生たちのリラックスした雰囲気でした。学生たちが明るい声で「おはようございます！」と来室する様子、そして12名の学生を教員2名、TA1名が見守り、細やかにサポートされる様子からも、NEXUSプログラムの学生とそれ以外の学生が共に安心して学習できる環境が整っていることがわかりました。

池田先生が授業中に話される「やさしい日本語」には、丁寧で温かみのある響きがあり、新鮮に感じられました。その一方で、不意に池田先生から「学生に向けての自己紹介を」とふられた際は、どの程度のスピードで、どのような語彙を使えばよいかに戸惑ってしまいました。日本語母語話者であっても普段の話し方から「やさしい日本語」に容易にスイッチできるものではないということを実感させられました（私も学内で様々な国籍の学生と触れ合う機会があるので、今後勉強したいと思います）。

今回の授業では、「ある個人を〇〇人と決定づける要因は何か」というテーマを、まずはクラス全体でアプリを用いた投票形式のクイズ、次にグループディスカッション、最後にグループごとのプレゼンテーション、といった3つの活動を通して議論し、理解を深めていました。前半は池田先生が主導となり学生の意見を引き出していくスタイルでしたが、途中からは学生が主体的にディスカッションを展開して、NEXUSプログラムの学生もそれ以外の学生も心置きなく自分の考えを共有していました。その活動は池田先生と任先生が目指されてきた学生たちの「実践的コミュニティ」(Community of Practice)がまさに実現していると感じました。

今回見学させて頂いたクラスは少人数でしたので、そのクラスサイズもリラックスした実践的コミュニティの実現に貢献していると考えられます。今後、履修者が増えた際に、NEXUSプログラムの学生とそれ以外の学生が活発に発言し意見を共有できる環境を作るためにどのような工夫がなされるのか、関心があります。引き続き双方の学生にとって有意義な科目としてさらに発展していくことを期待しております。

最後に、今回授業見学をご快諾くださいました池田先生、任先生、そして学生の皆さまに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

まち さえこ